蠕蠕の寄多羅月氏領バルク地方侵入について

内田吟風

西暦第五・六世紀にモンゴル地方に繁榮した蠕蠕(柔然)[1]が、かの五五八年(乃至はそれよりやや後)にローマ皇帝Justinianに居住地を乞い、下ドナウの沿岸Pannonienに居住地を得、後年(790～796) Karl大帝及びPippinに撃倒せられるまでの永い間、ビザンツはじめヨーロッパの諸國を攻めおびやかしたアヴァール族(Abaroi, Awaren, Avars)の源族であるか否かという問題は、前世紀末以來の未解決問題として、賛否の論爭が繰返えされながら、今に確定的な結論には到達していない。しかしながら、近時における蠕蠕及びアヴァールに關する諸研究、並びに當時におけるササンペルシヤ及びビザンツの對外・蠻族政策に關する諸研究は、この問題の周邊的諸事項を次第に明瞭ならしめており、本問題の結論の確定の遠くないことを豫想せしめている。

私は現在、蠕蠕アヴァール同一説に對し、それが當否を速斷せんとするものではない。しかし私は昨年「丁令柔然族史二考」(石濱博士古稀記念東洋學論叢)を發表し、從來、該同一説の成立を困難ならしめる重要理由の一として考えられてきたところの、

中國史料によれば、突厥(テュルク)[2]がモンゴル地區で蠕蠕(柔然)を撃破したのは五五五年と見ねばならぬのに、ビザンツ史料は東方におけるテュルクのアヴァール撃破を、テュルクのエフタル撃滅(五五八～五六八年の間のことと考えられる)以後として傳えている。これは蠕蠕とアヴァールとを同一視できぬ時間的理由である。

という論説に對して檢討を加え、實際は中國史料によつて

も突厥の蠕蠕擊破は五七〇年～五八〇年ごろに繫けるべきことを明かにし、同一說の成立を妨げる理由の一を除去したので、本論文ではさらに、Parker 氏らが主張した同一說不成立の地理的論據、すなわち、

蠕蠕の西境はこの同一視を正當化する程十分には西方に達していなかつた。その英主、社崙可汗のときですら、西は Kharashar に達せるのみ。嚈噠（エフタール族）及びイリの民族のほかは、蠕蠕は西方民族と全く交渉をもたなかつた。

という見解(3)について檢討を加えて見たいと思う。

先年 C.A. Macartney 氏は、On the Greek Sources for the History of the Turks (BSOS 11/2. 1954) の中で、パーカー氏の說の當らざるを云つているが、きわめて簡畧で、なお論ずべきものが多々殘されている。

パーカー氏が蠕蠕の勢力の西限をカラシャールとしたのは恐らく北史魏書の蠕蠕傳が、蠕蠕の社崙可汗の功業をのべて「其西則焉耆之地、東則朝鮮之地云々」とあるのに據つたものに相違ない。この北史や現行本魏書に「焉耆之地」とあるのは通典によつて「焉耆之北」と改めねばならぬことは、拙稿「柔然族史序說」にのべた通りであるが、とにかく社崙時代の蠕蠕勢力の西限は確にカラシャール（の北）附近であつたと考えられる。しかしこの史料で、蠕蠕の全時代を通じて、その勢力はカラシャールより西には延びなかつたと推察するのは妥當でない。

いま魏書西域傳の大月氏國の條を見ると、

大月氏國は盧監氏城に都す。弗敵沙の西にあり。代を去ること一萬四千五百里。北、蠕蠕と接し、しばしば侵さる。遂に西にうつり、薄羅城に都す。弗敵沙を去ること二千一百里、其王寄多羅勇武にして遂に師を興し大山を越えて、南のかた北天竺を侵す。乾陀羅より以北の五國、盡くこれに役屬す。世祖の時、その國人京師に商販し、自ら云う「よく石を鑄て五色の瑠璃をつくる」と。ここに於て礦を山中に採り、京師に於てこれを鑄る。既に成る。光澤乃ち西方より來る者よりも美なり。（中畧）これより中國の瑠璃遂に賤しく、人またこれを珍とせず。

の一文の存するのに氣ずくであろう。申すまでもなく現行の魏書西域傳は、宋代開板の時、（魏收原著の魏書西域傳はすでに亡逸していたため、元來、魏收の魏書西域傳、周

書西域傳等を轉寫したものであるところの）北史西域傳より再轉寫して出來上つているものであるけれども、[4] この大月氏國の條（並び下に引用する小月氏國の條）が魏收原著の姿を傳えたものであることは、その文體からも、また魏收原著に依據節錄したと思われる唐杜佑通典、宋樂史太平寰宇記の大小月氏國記事との對比から見ても、疑ないところである。[5]

ただ魏書西域傳は、上掲の如く北魏時代大月氏國初期の都を「盧監氏城（ロカンシ）」としているのに、北史西域傳は騰監（シヨウ）氏城としている差がある。そのいずれが正しきか、乃至は魏收原著には元來どちらが書かれていたかは、明かにし得る他の史料なく、決定し難い。ただこの都城は、弗敵沙（バダクシャン）よりの方位距離等よりみて、これが今の Balkh の地なることは、榎一雄氏の近著「キダーラ王朝の年代について」（東洋學報四一・3）の所論の通りと思う。

ただ何故かかる兩書の差を生じたのか。盧は Stadt, Siedlung をさすソグド語の lam に關連するものなるやも知れぬが、[6] 又全く衍字なるやも知れぬ（漢代以來、大月氏王の居城は監氏城であつた）。もし衍字とすれば、古く魏書・北史が轉寫され行く間に、字形の類似より監を盧に誤り、それに氣づいて下に正しく監の字を書き改めたため盧監となり、さらに後人がこの衍字なるを氣づき、衍字なることを示すものとして騰（イヨウ）の文字を盧の傍に附したものが、次には騰監と書き傳えられるに至り、それが板に附され今日に至り、北史の方では騰監として傳わり、現行本魏書の方では盧監として板行されていつたものであろう。同樣の例は噸噠の傳で、北史には「熙平中遣騰伏子統」とあるに對し、魏書では「熙平中、遣王伏子統」とあることで、恐らく騰も王も共に衍字であろう。

さて上掲魏書西域傳大月氏國の條記載の事件は、他の中國史料や西方史料と對比考察すれば、一體どのように理解さるべきものなのであろうか。中國史料で云う大月氏國が、西曆第一世紀半以後は、アム流域・ヒンヅクシュ山脈間のバクトリア地方を中心として強勢を誇つた Kušan（貴霜）王國に當たることは周知の通りである。而してこの北魏時代の大月氏寄多羅王國が、ギリシャ史料に見える *Κιδαρραι. Οὔννους τοὺς Κιδαρρας καλουμένους*（*Κιδαρρας Οὔννους*）や、クシャン貨幣の Kidāra Kušāna Sahi. Sri Sahi Kidāra と讀まれる銘文中の Kidāra の國に當るものであることは云うまでもなく、R. Girshman 氏の考定せる如く、寄多羅系大月氏國はいわば第四クシャン王朝と云うべきも

のである。現在、R. Girshman, Le Chionites-Hephthalites (Le Caire, 1948) や、榎一雄・上掲書等によつて、Kidara 王朝の事蹟は解明せられたところが極めて顯著である。ただ榎氏の所論中、キダーラ(寄多羅)と蠕蠕との關連に關する部分には首肯し難い點が存する。いま Girshman 氏の論著その他を基礎として簡潔な推論をしている W. Samolin 氏のキダーラに關する近著 A Note on Kidara and the Kidarites (CAJ II-295-297) に依據してキダーラ王朝の興起を眺めよう。

ササン朝ペルシャの Shapur 二世(三一〇〜三七九)が第一次ローマ戰爭に從事しているすきに乘じて、これまでササンに臣從していたクシャン國(第三クシャン王朝)は獨立したが、三五〇年ローマ戰爭が終結するとシャープール二世は第三クシャン王朝を討伐してこれを亡ぼし、その領地を再び手に入れたのである。

しかし再び勃發したローマ戰爭の影響と思われるが、彼はクシャンの一王と妥協した。三五九年ごろこのクシャン王と當時ササン朝ペルシャの東境の脅威者であつた Kionit 族とが、シャープール二世と和し、その同盟者となつたことは、アミァヌス・マルケリヌスの記錄でも知られるが、なおこれを裏づける一連のクシャン貨幣があり、それはシャープール二世の王冠と Kidara のそれを刻している。キダーラは、バルクのササン系王の支配に終止符をうち、クシャン舊領土を恢復したが、シャープール二世は、自己を宗主と認めさしただけで、このキダーラのクシャン舊領占有を承認したのである。

上掲、西域傳大月氏國の條に、寄多羅の支配する大月氏の都が盧監氏城(バルク)であると記せられているのは、實にこの Kidara のクシャン恢復後の狀態をのべたものに外ならないと思われる。

R. Curiel et D. Schlumberger, Trésors Monétaires d'Afghanistan (Mém. de la déleg. archéologique française en Afghanistan XIV. Paris. 1953) は、キダーラをシャープール二世と同一時代人とするギルシェマン氏の考說に疑問をもつたが、これに對し Samolin 氏は次のごとく斷じている。

「Curiel Schlumberger は Kidara が彼の貨幣上に模刻した王冠は、シャープール二世のそれではなく、Yezdegerd II (438-457) のそれであるとの理由から、Kidara は Yezdegerd II の同時代人であると考えている。著者らは、この同一視をば、ササン王國の王冠についてのクルトエルドマンの研究『ササン朝王冠の發

達（アルスイスラミカ一五・一六）一九五一』にその基礎を置いているが、その結果 Curiel と Schlumberger は、從來キダーラに屬すると考えられて來た一貨幣をば〃一人の未知の支配者〃のそれと考えるのである。この Curiel と Schlumberger の論文に對する批評として A.D.H. Bivar (JRAS. 1954) は『未知の支配者は蠻王キダーラに非ずとする彼らの論旨は、もしすべての十一の貨幣銘をば Bogo Kidara oozorko Košano šaho と讀むべしとする考を否定するならば、もつと印象的であつたろうに』と云つている」。キダーラ王の興起が第四世紀半のことであるのは、貨幣銘以外の文献によつて知られるところの後述の如き當時のアフガニスタン情勢からも疑ないところである。なお上掲魏書の文意より推せば、當時の中國人は Kidara を人名と解していたと見るべく、殊に同じく魏書小月氏國の條に「其王は本、大月氏王寄多羅の子なり」とあるのは、明かに人名たるを示している。クシャン貨幣銘文の「キダーラ、クシャーナ王」「クシャーナのキダラ」も同樣である。しかしギリシャ史料（プリスコス記錄）に四五六年ペルシャと交戰中のクシャンを *Ουννους τους Κιδαριτας καλουμενους*「キダラと呼ぶフン」*Κιδαριτας Ουννους*「キダラのフン」と云つている用法等は種族名を思わしめる。始祖の名を王朝名乃至代々の王號として用いたため、他國人より種族名の如くにも用いられたのであろう。Haussig: Theophylakts Exkurs: Byzantion XXIII. p. 353 はギリシャ史料の *ριει* は單なるギリシャ語の Suffix だから、本來の族名は *Kidar/ *Qitar であろうとし、中國史上の契丹も（中國史書は外國音 r を n に書き換えている例多ければ）*Qitar を寫せるものとし、キダラ契丹説を説いている。しかし第四世紀には、未だ東モンゴルの弱小民族に過ぎなかつた契丹の狀勢や、契丹の原名は *riei-tan* (*riei-tai*) であること（愛宕松男・契丹古代史の研究・一九五九、頁一六三～一七一）から見て、キダーラを契丹とすることには難點がある。

さて、上掲西域傳の傳えるところによれば、キダーラは、やがて北境の蠕蠕よりしばしば侵略を受けることとなり、遂に Balkh なる盧監氏城を捨てて西方に徙らざるを得なくなつた。（この魏書北史西域傳並びに通典等に「蠕蠕」が大月氏を攻擊した」と記錄されているのは「嚈哒が大月氏を攻擊した」の誤記であるとなす考が從來廣く行われているが、何等史料的根據あるものでない。バクトリアにエフタルが勢力を得るのは、後述の如く蠕蠕が大月氏を擊破した以後のことと見ねばならぬ。）

この蠕蠕のバクトリア侵入についての正確な年時、情況を魏書は傳えていないが、西域傳の文意より見て、この事件が、キダラ大月氏の商人が瑠璃製法を傳えた太武帝（424～452）の代またはそれ以前のことであると考えられるが、さらに蠕蠕がアム河流域にまで勢威を及ぼす程に強大となつた以後であり、而もこの地方の住民エフタル族が強大化し

獨立して蠕蠕の支配下より脱出するに至るまでのことであると考えねばなるまい。エフタル族のことを記した通典邊防典、嚈噠の條には、「嚈噠國、或云高車之別種、或云大月氏之別種、其源出於塞北自金山（而南）、至後魏文成帝時已八九十年矣」[7]とあり、さらに同じくエフタルの事を記した滑國の條には「後魏之居桑乾也、滑猶小國、屬蠕蠕。後稍強大、征其旁國波斯、渴槃陀、罽賓、龜茲、疎勒、姑墨、于闐等國焉」とあつて、エフタル族がアム流域に存在を示したのは、文成帝（452～465）時代より八九十年以前、すなわち三七〇―三八〇年ごろであるが、蠕蠕が勃興して西方に勢威を及ぼすとこれに服屬したことがわかる。柔然が社崙可汗の功業でモンゴルに興起したのは、四〇二年のことであるが、その勢力が西にのびたのは吳提可汗のときで、四三四年ごろには、イリの烏孫族は蠕蠕に壓迫せられて葱嶺中に退縮しているのである[8]。

以上の狀勢より考えて、蠕蠕が Kidara（大月氏寄多羅）を攻め、其都 Balkh（盧監氏城）を立ちのかしめたのは、大體四三四年ごろのことと見るべきであろう。なお恐らく、このときの攻戰には、古來からのステップ遊牧民の常例より見て、支配的民族たりし蠕蠕は必ずや服屬民族である嚈噠（エフタール）の兵力を利用したのに相違ないと考えられる。なお北史（及び現行本魏書）西域傳小月氏國の條には

小月氏國は富樓沙城（Purusapura＝Peschawar）に都す。其王は本、大月氏王寄多羅（Kidara）の子なり。寄多羅、匈奴の逐うところとなり、西徙す。後、その子をして此の城を守らしむ。因つて小月氏と號す。……其城東十里、佛塔あり周三百五十步、高さ八十丈、佛塔の初建より計りて武定八年に至るに八百四十二年なり。いわゆる百丈佛國なり。

とあつてキダーラの西徙を「匈奴の逐うところ」の結果としているが、これは魏收撰修の魏書原本には「蠕蠕の逐うところ」とあつたものを、北史編修者が轉寫の際匈奴と誤記したものに過ぎないことは、魏書原本[9]より引用したに相違ないと考えられる唐の杜佑の通典、宋の樂史の太平寰宇記には、正しく、

其王本大月氏王寄多羅子也、寄多羅爲蠕蠕所逐、西徙、後令其子守此城 云々

と記されていることによつて明白である。

因みに、キダーラを Balkh より逐うた蠕蠕の西方前進部隊は、その後天山々麓地帶を高車が占有するに至つたのちは、當然、本國との連絡を絶たれたに相違なく、その後シル、アム流域の主人公となつた嚈噠や西突厥に吸収せられたものと推察される。後年、ペルシャ人より Kermihion (Κερμιχίωνες) すなわち〃虫のヒオン族〃と呼ばれたトルコ人(ペルシャ人は突厥以外のアルタイ系種族をもトルコ人と汎稱した)[10]の一種や、同じくテォファーネスの記錄に見えるボスホロス附近の蠻族酋長 Χορδας (または Γορδας) やブルガール王公表に載せられている Kourʒt などは、この時代に西移した蠕蠕の後裔、或はその殘滓的枝族であつた蓋然性が強い。H.W. Haussig 上掲書によれば Kerm は中期ペルシャ語で虫をさす語である(近世ペルシャ語では Kirm)。Χορδας, Kourʒt の中にはともに古代トルコ語の qurt (虫) を見出すのである。qurt は虫をさす言葉であるが、また種族トーテム獸、狼をば(直言せず暗示的に)さすアルタイ語である。蠕蠕の可汗氏族名の郁久閭、傳說的始祖名の木骨閭に中にもこの qurt を見出し、彼らが狼をトーテムとするも、これを qurt すなわち虫と呼んでいた種族であつたことは推察に難くない。同じ東胡系民族の出身としてアルタイ語を母國語とした北魏の太武帝が彼らを虫として蠕蠕の記名をなしたのも、彼らの種族トーテムに因んだ揶揄的行爲に外ならないと考えられる。(詳くは H.W. Haussig 上掲書 三五四頁を見よ。)なお同氏はアヴァール=蠕蠕同一說を否定する立場をとるが、自分は、五七六年ティベリウス帝がトルコ可汗庭に派遣したヴァレンチヌス等一行の使節團に對し、トルコ可汗 Tardus (達頭) の弟がアヴァールの事に觸れ、彼らアヴァールを虫として語つた事件(メナンデル所傳)は、同じ狼をトーテムとするトルコ系民族でも阿史那氏族系は虫族ではなかつたことと、アヴァールが西方に進出した蠕蠕の一枝であつたらしいことを強く思わしめるものと思う。

蠕蠕のために Balkh (盧監氏城) を逐われたキダーラは、西に逃れた。これは大月氏國の傳にはつきりと西徙の二字が明記されているばかりでなく、小月氏の傳にも、寄多羅西徙と明記されていて疑う餘地はない。榎氏上掲書は、盧監氏城と薄羅城とは同一都市であり共に Balkh であつたとするため、キダーラは遷都したのではないとするが、これら魏書傳文に云う「西徙」の二字を無視するわけにはゆかぬはずである。且つ傳文には「盧監氏城は弗敵沙(バダクシャン)の西にあり」とあり、その間の距離は記されていないけれども、魏都の代と盧監氏城との距離一四、五〇〇里に對し代と弗敵沙との距離が一三、六六〇里であることから、弗敵沙と盧監氏城間の距離は、大約八四〇里なるべきことは、すでに先人も論じたところであり[12]、否定できぬところであろう。しかるに傳文にはさらに「薄羅城は弗敵沙を去ること二千

一百里」とあつて、盧監氏城弗敵沙間の距離と薄羅城・弗敵沙間の距離には甚しき差異があることを示している。古代中國史料における西域諸國についての方位、里數記事に科學的正確さを求むるは勿論妥當でないが、[13] しかしこの差は餘りにも大で、これのみからも薄羅城が盧監氏城と同市であるとは、到底考えられないのである。

J. Marquart: Eranšahr S. 55 が、漢代高附翕侯の都を Kabul と考え、これを一つの前提として薄羅をカスピ海東南岸の Krasnowodsk の入江にそえる Balchān 市に比定したことは、その前提において誤を含むけれども（高附翕侯の都はカーブルではない[14]）しかし結論的には、弗敵沙からの方位、距離並び後年におけるペルシャ王のキダーラ王都攻略情況等を考えれば、妥當と認めざるを得ない。

ギリシャ史料（プリスクスの記錄）は四六七年ごろペルシャ皇帝 Pērōz が Gurgān より進んでキダーラ族を破り、その都市 *Balaáμ* (Balaam) を占領したことを傳えているが、マルクヴルト氏はこの Balaam を Balkan に比定し、薄羅をその Balaam の音譯とするのである。なお Haussig 氏は、lam はソグド語で Siedlung Stadt を意味するから、この *Balaaμ* は Baralam (Stadt des Fürsten) の訛れるものであるとしているが、[15] けだし妥當な解釋であろう。

かくキダーラ王は蠕蠕のためにバルクを去つてカスピ海南東のバルカン方面に西移したが、その後、再び勢威を恢復したものの如く、大山すなわちヒンヅクシ山脈を越えて北インドに侵入し、乾陁羅 (Gandhāra) 以北の五つの國を服屬せしめたのである。なお北史及び現行魏書の西域傳大月氏國の條は「遂西徙、都薄羅城、去弗敵沙二千一百里、其王寄多羅勇武遂興師、越大山、南侵北天竺、自乾陁羅以北五國盡役屬之」とあるのみなので文意が曖昧である。即ちキダーラの西徙そのものが、インド侵入にあたる如くにも受取れる。勿論それなら西徙ではなく南徙であるが、とにかく曖昧を免れないのである。しかし通典や太平寰宇記等、魏收原書を寫したと見るべき文献には、二千一百里の下に「後」の一字があるので事情は明かに了解し得る。恐らく魏收原著には後の字があつたのを北史の編纂者が轉寫の際遺脱し、さらにこれが現行本魏書に傳わつたものであろう。

このキダーラ王のガンダーラ地方征服、小月氏國建設の正確なる年時は勿論不明であるが、上述の如く四三四年ごろキダーラ王がバルクを逃れて、バーラーム（バルカン）に都してより、數年國力を蓄積して北インドに南征したとすれば、四三五年またはその數年後であろう。後年（北魏の正光元年五二〇）北魏の僧宋雲が北インドを通過したときには、すでに小月氏國は存在せずエフタールの勅勲（Tigin）[16]が統治する乾陀羅（ガンダーラ）國があり、「エフタルが治國以來すでに二世を經たり」とある。恐らくエフタールは小月氏王より乾陀羅を奪つたのであろうから、小月氏國の滅亡は宋雲通過の五二〇年より四十年程も以前[17]のことと見るべきであるが、このキダーラ系小月氏國をさすと考えられる車多羅（キョタラ）國の使者が北魏の太和元年（四七七）に中國に舍衛（Srāvasti）・疊伏羅（Jabula）等近隣インド諸國と共に入朝しているのに徴せば、小月氏國の滅亡は四七七年の直後ごろと斷ずべきであろう。さすれば、キダーラ系小月氏國の存續はきわめて概略にみて四三五年ごろより四八〇年ごろまでの間とすべきであろう。

キダーラ王はガンダーラ以北五國を攻略すると、息子にこの地を委ね、富樓沙城（Purusapura 卽ち Peshawar）に鎭せしめたこと及びこの國が小月氏國と稱されしことは、[18]魏書西域傳小月氏國の條の記するところである。さればその文意よりして、キダーラ王自身は北インド征服後、首都 Balaam 薄羅に北歸したものに相違ない。

J. Marquart, Eranshar. pp. 56-58 はプリスクスの記錄等をもとにして、四五六年にはペルシャの Yezdegerd 二世がキダーラ人と戰つていたこと、その戰線が *Τόρα* グルガン方面であつたこと、Yezdegerd II が死んで Peroz (459-484) が卽位するとクシャン王（すなわちキダーラ王）が死んで、弱年の子クンガスが位をついだが、長期戰に惱んだペーローズがこのキダーラ人の王に緣組みを申込んだこと等々を明かにしている。クンガスの父王はインドより歸還した寄多羅か、またはその子孫なるキダーラ王であつたと思われる。

Κοίνγας クンガスは、ハウシヒ氏の云う如く正しくは *Κοίνγαν* で、クン可汗の意[20]であろう。周知の如く可汗號は蠕蠕によつて帝王の尊稱にされたものである。[21]かつてはキダーラ系クシャンを困めた蠕蠕の西方前進部隊も高車エ

フタル兩族の興起によつて本國との連絡を斷たれ、却つてキダラ系クシャンに降る蠕蠕人も多く、その結果キダラ・クシャンの王も蠕蠕的尊稱の可汗の號を有するに至つたのであろう。

四六八年にビザンツに現れたペルシャ使節は、Peroz がキダーラ人を破り、その都市 *Bakaqu* を奪取したことを誇つている。大月氏の都薄羅も遂に落ちたのである。マルクァルト氏（並びにマカートニー氏ら）は、このクンガスが、首都を失つたために南下しヒンヅクシを越えガンダーラに入つて小月氏國を建てたと考えるが[22]、これは漢文史料の誤解に過ぎない。ガンダーラでの小月氏國建設は本論既述の如く解さねばならぬ。北インドを委ねられたキダーラ王の息子（小月氏王）とクンガスは別人であり、これを混同することはできない。

なお北史西域傳に「乾陀國（ガンダーラ）、本名業波爲嚈噠所破、因改焉」とあるため、從來ガンダーラなる地名はエフタルの該地征服にはじまると解されてきたが、これは疑わしい。北史は宋雲行記を誤解して加筆引用したものに相違ない。行記にはエフタル侵入によつて改名されたとは書いていない。上掲魏書西域傳大月氏國の條には、寄多羅が乾陀羅以北の五國を征したとガンダーラの名をあげており、キダーラ侵入以前か又はキダーラ入居のときに改名せられたと見ねばならぬ。

Kidāra については、なお述ぶべき事項が多いが、本論文の主目的である蠕蠕勢力のアフガニスタン伸張、蠕蠕のキダーラクシャン攻擊の情形、その影響等についてはすでに、史料の許す限り明白になし得たと思うから、いまは深く言及せぬ。要するに蠕蠕とアヴァールを同一なりとするか否かの問題は一應別としても、西曆第五世紀、蠕蠕の西進部族がバルク地方にまで進出していたことは、以上の如く中國史料によつて、またその情形・影響は東西兩史料によつて、相當明白に、これを知ることを得るのである。

註

(1) 蠕蠕（柔然）なる名稱は、嚴密には、郁久閭部族を中心とする遊牧國家＝同族的部族連合体の名稱と見るべきであるが（拙著柔然族史序說・羽田博士頌壽記念東洋史論叢）、ここでは廣義に、その連合体の中核をなせる民族の意味に用いる。蠕蠕の興亡については拙稿「後魏柔然表」（東洋史研究八・5・6參照）

(2) 突厥の二字がアルタイ語 Türküt（Türk のモンゴル語型複數）

の音譯であることは否定できぬが、かくの如き複數形は彼等の自稱でなく、彼等は一に Türk と自稱したのだから、突厥の原名は Türk とせねばならぬ。

(3) E.H. Parker, A Thousand Years of the Tartars, p. 121.

(4) 拙稿「魏書の成立について」(東洋史研究二・6)。

(5) 上掲拙稿參照。特に西域傳の成立補綴復原等については船木勝馬「魏書西域傳考」(東洋史學二・三)。

(6) Iam の語義等については、H. W. Haussig, Theophylakts Exkurs über die Skythischen Völker (Byzantion XXIII 1958. p. 394) 參照。

(7) 「而南」の二字、北史西域傳に見ゆ。恐らく魏書原本に有せしを杜佑が脱落せしものならん。又文獻通考には「七八十年」とあるが、通典の八九十年をとるべきである(船木勝馬・エフタルに關する中國史料について・史淵六一)。

(8) 北史魏書西域傳烏孫國の條の記載によれば、烏孫のパミール退縮は、太延三年(四三七)遣使以前のことと見ねばならぬ。太延五年に蠕蠕可汗の吳提が、「今天下唯我彊なり。爾後魏の使者あるも恭奉する勿れ」と西域諸國に令したのは、その勢威がひろく西方に伸びたのを示している。後年魏の使者が訪ねた烏孫はすでにパミールに退縮した烏孫の地と考えられる。これ以後の西域諸國の北魏通商は專ら蠕蠕の認可の下に行われたものと解される。

(9) 魏書西域傳小月氏の條が、魏收の原本に存せしものに相異ないことは船木勝馬「魏書西域傳の復原」下(東洋史學・五)を見よ。もしも大月氏の條に見える蠕蠕の攻擊と別個の(卽ち蠕蠕でないものの)攻擊を、小月氏の條が記しているのならば、魏收は當然その旨を明記しているはずである。小月氏の條に見える寄多羅の西移は、大月氏の條に見える蠕蠕侵入による西移と同事件を云つていることは云うまでもない。北史小月氏の條に「匈奴」とあるのは北史作者の誤寫による。これは魏收原本を寫した通典・太平寰宇記に蠕蠕とあるによつても明である。

(10) H. W. Haussig., Die Quellen über die zentralasiatische Herkunft der Europäischen Awaren (CAJ. II.1)

(11) Haussig idid. 同氏はササン史料 Kârnâmagh に、ペルシヤの北東に住んでいた種族の王が「虫の王」と稱されたこと、プロトブルガール系支配者名の Κροβατος には古代トルコ語の *qurubatu (虫の王) を見出し得ることを說いている。同氏はしかし、これらを以つてトルコ族一般の狼崇拜の結果と見、蠕蠕との直接の結びつきとは認めない。しかし、突厥や高車が狼を特に虫として自族トーテムとした證左は存せず、虫トーテムは蠕蠕特有のものであつた如く思える。西トルキスタンの虫トーテム種族は蠕蠕の後裔である可能性が強い。

(12) 白鳥庫吉「西域史上の新研究」(西域史研究一四五頁)。

(13) とくに、バダクシャン・バルハン間は眞の西徙ではなく、西西北移とすべきであり、その距離を二千一百里とするのは稍短きに失するが、それ程の正確さを古代中國史料に求めることは無理であろう。また、魏書西域傳の里數には實地を踏みし結果でなく、漢書西域傳の里數に代・長安間距離一九〇〇里を机上加

算して算出せる個所ありて注意を要することは松田壽男「古代天山の歴史地理的研究」頁一六四～一八六に詳し。されど机上計算なればとて、全く史料價値なしとは云えぬ。

(14) 白鳥庫吉・上掲書・一四八～一五一頁。

(15) 注(6)參照。

(16) 突厥その他トルコ系諸族における皇子または皇弟の稱號。特勤・直勤などとも漢字譯されている。イラン種らしいエフタールが此號を用いたのは西方に來ていた蠕蠕の影響であろう。

もちろんエフタルがイラン種であつたか否かは確定的でない。北史・通典が一説として傳えているエフタル＝高車族説が眞實ならば、エフタルは蠕蠕より輸入するまでもなくテギンの官號を自ら古くより有していたであろう。また、エフタルがイラン系であつても、この兩書の傳える如くエフタルは、かつて金山（アルタイ）に住んでいたことがあつたのだから、その當時鮮卑系諸族よりこの官號を早くから輸入していたかも知れない。

(17) 匈奴・鮮卑等の首長の大体の在位平均年數は一王十二年である。勿論、自然環境生活狀態その他で異同あらんも、小月氏國王の一代の年數も左程長いものであつたとは考えられぬ。

(18) 車多羅が寄多羅であること、その入朝等については榎一雄・エフタル民族の起原（和田博士還曆記念東洋史論叢）が論じている。

(19) Samolin 氏上掲書もすでに強調している如く、この小月氏國は、漢書に出ている所の漢代羌族間に存在した小月氏國とは全く別個のものである。また後秦の鳩摩羅什が譯した Aśvaghosa 馬鳴菩薩傳に見える北天竺小月氏國とも直接の關係を認めることはできない。ただキダーラ系小月氏國が建設されるはるか以前にもこの地方に小月氏國と呼ばれるものがあつたことは認めねばならぬであろう。

(20) マルクワルト氏もすでに Über das Volkstum der Komanen, 1914, p. 70 においてこのキダーラ王の眞の名（實はタイトル）が qun-qān であることを示唆している。それは Haussig 氏によつて一層明確化された。「プリスコスによれば Κουνχας は Κουνχαν の語尾のνを第四格を形成するものと考え、そのために、それにつづく主格として用うべき Κουνχαν を Κουνχας に改めた筆寫者の過誤による。Boorsch のテキストに Κουγχαν とあるは、すでにマルクワルトによつて Κουνχαν に改められている。古文書學上、この改正は異議なし。後世の小文字、（一六世紀よりの Excerpta 手寫）ではνは符點なく、この形ではγと區別し難い」Haussig 上掲書三五三頁。クン可汗のクンについては現在意義不詳として置くべきであろう。

(21) 汗・可汗は鮮卑で古くから酋長號として用いられたが、蠕蠕に至つてはじめて單于號にかわつて大帝王の號となつた（拙稿「Some notes on Jou-jan: Studia Altaica: Wiesbaden 1957 及び「柔然族史序説」參照。

(22) Marquart, Eranšahr p. 58. Macarney, ibid. p. 271.

(23) 業波羅の原名については諸説ある。いまは一應堀謙德・解説西域記の説に從う。

Yü-pei-ts'ang 預備倉 and Shê-ts'ang 社倉 under the Ming 明

Ayao Hoshi

For the Lung-ch'ing 隆慶 and the Wan-li 萬曆 eras, the system of Shê-ts'ang was established to displace the declining Yü-pei-ts'ang system. Both were for the relief of the destitute, the old system was public, but the new one civil. This change runs parallel with the antecedent change from the Li-chia 里甲 system to the Hsiang-yüeh 鄉約・Pao-chia 保甲 system in the rural organization, and it is thought that the Yü-pei-ts'ang system functioned in co-operation with the Ch'ang-p'ing-ts'ang 常平倉, Lin-ch'ing-ts'ang 臨清倉 and Tê-chou-ts'ang 德州倉.

The Juan-juan (蠕蠕)'s Invasion of Kidara--Kušan

Ginpû Uchida

The articles on Greater-yüeh-shih 大月氏 State, and Lesser yüeh-shih 小月氏 State in Hsi-yü-chuan 西域傳, Wei-shu 魏書 are thought to be reliable as the historical sources, comparing with the corresponding parts in T'ung-tien 通典 and T'ai-p'ing-huan-yü-chi 太平寰宇記 which are considered to have survived from the original edition written by Wei-shou 魏收. According to these records on Ta-yüeh-shih State, Chi-to-lo 寄多羅, the King of the state, moved the capital westward from Lu-chien-shih 盧監氏 Castle to Po-lo 薄羅 Castle on account of the Juan-juan's invasion. "Chi-to-lo" and "Lu-chien-shih" Castle can be identified, the one with "Kidara", a term which is found in the Greek sources and in a series of Kušan coins; and the other with "Balkh". The author agrees with J. Marquart's opinion that Po-lo Castle was situated at Balkan, in the south-east corner of the Caspian sea. The article on Hsiao-yüeh-shih State in Wei-shu, the current edition, states that Chi-to-lo's migration to the west was caused by the invasion of the "Hsüng-nu" 匈奴. But the author

supposes that Wei-shou himself must have written "Juan-juan", not "Hsüng-nu" in his original edition, judging from the fact that the word "Juan-juan" occurs in the corresponding position both in the texts of the T'ung-tien and T'ai-p'ing-huan-yü-chi. Moreover the Juan-juan's invasion of Ta-yüeh-shih State can be dated about 437 A.D. when the Juan-juan extended their power in the west, as far as the Ephtalite. Marquart says in his article that the Hsiao-yüeh-shih State was founded by Kunghas, the son of Kidara, about 468 A.D. when he was defeated by the Persians. But in the opinion of the author, it was founded by Kidara to whom another son, not Kunghas, succeeded after Kidara was driven out of the Lu-chien-shih Castle.

The pre-history of Shen-t'sê-chün 神策軍

Tatsuo Obata

The Shên-t'sê-chün is famous in history for its great influence over the politics of the T'ang 唐. It was the most powerful body in the Chin-chün (禁軍, the Imperial Guards). But originally it had been created not as a detatchment of the Imperial Guards, but only as one of the frontier guards. Why did it come to belong to the Imperial Guards? The author tries to present an answer, tracing its career through the An-Shih 安史 Rebellion and the Tibetan's invasion of China.

Tao-yen 道衍 (Yao Kuang-hsiao 姚廣孝)'s Life

Tairyô Makita

T'ai tsung 太宗, the Second Emperor of the Ming 明, made his way to the throne by disloyal means, i.e. the Ching-nan 靖難 Rebellion. And the ringleader of this rebellion is asserted to be the Buddhist monk, Tao-yen, 1335–1418. Afterwards he was "graciously permitted" to return to secular life by the supreme commond of the emperor and then given the